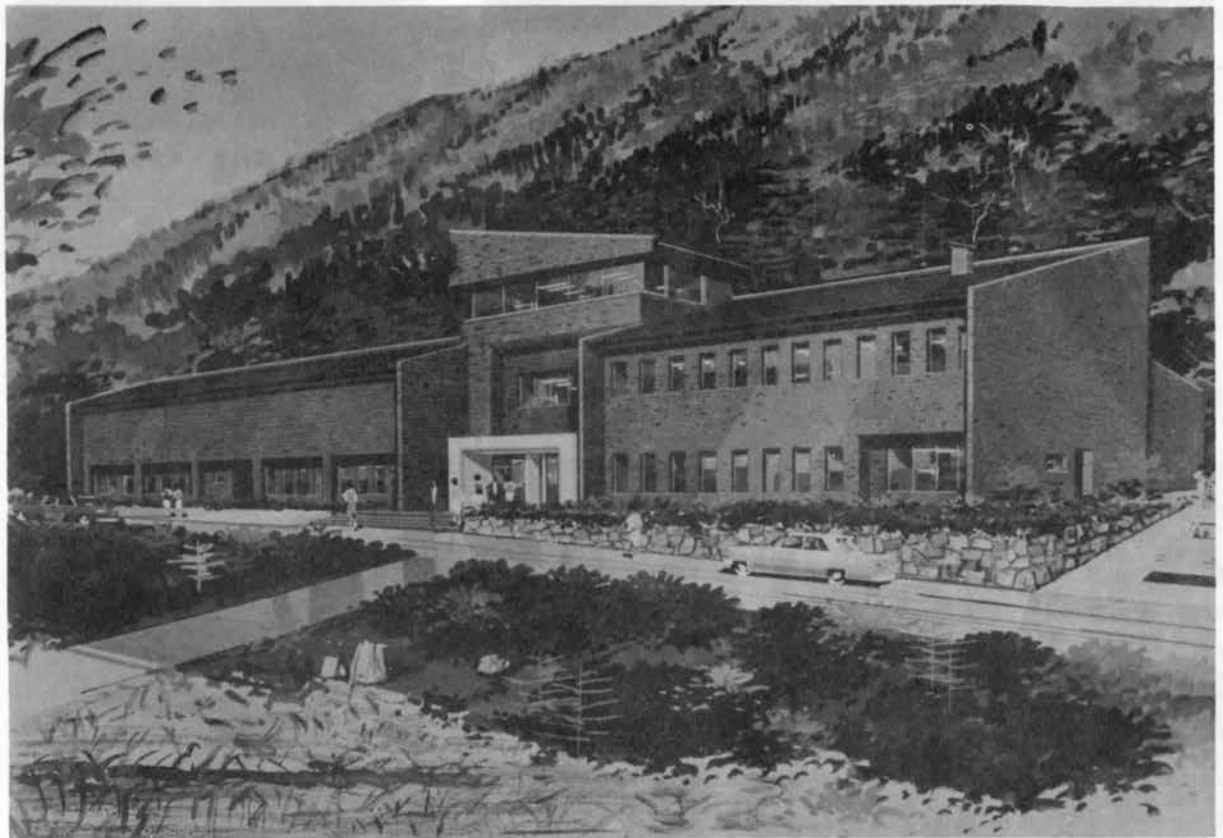


# 山と博物館

第25巻 第9号

1980年 9月25日

大町山岳博物館



山岳博物館完成予想図

## 山岳博物館の改築にあたり

「創業は易く守成は難し」これは昭和二十六年十一月一日、大町山岳博物館が創設された伊藤半二氏から寄せられた祝辞の一節です。氏はさらに言葉をついで、内容を充実し、名実共に本邦唯一の山岳博物館として育成し、地方文化に貢献する事を祈念すると結ばれました。

この日誕生した博物館は今年で満二十九才の誕生日を迎えることになりました。この間、市民の皆さんの温かいご支援をいただきながら、創設の当初に構想された大町山岳博物館の理想像を求めて歩みつけて参りました。

博物館の最初の建物は、現在の神楽町公民館の近くにあった富国せんい工場の講堂を改造したものでした。その後五年をへた昭和三十三年八月十五日、大糸線全通を記念して現在地に移転しました。建物は当時の大町高校の改築にともない、明治三十六年に建てられた古い校舎をそのまま移築して活用したものです。

古い木造のため老朽化が激しく、貴重な資料を保存公開し、これら資料を次代の人々に伝えて行く使命をなす博物館として多くの問題がでて参りました。幸いにもこの期に全面改築の方針が打ち出され、本格的な充実した博物館が建設され面目を一新することになりました。

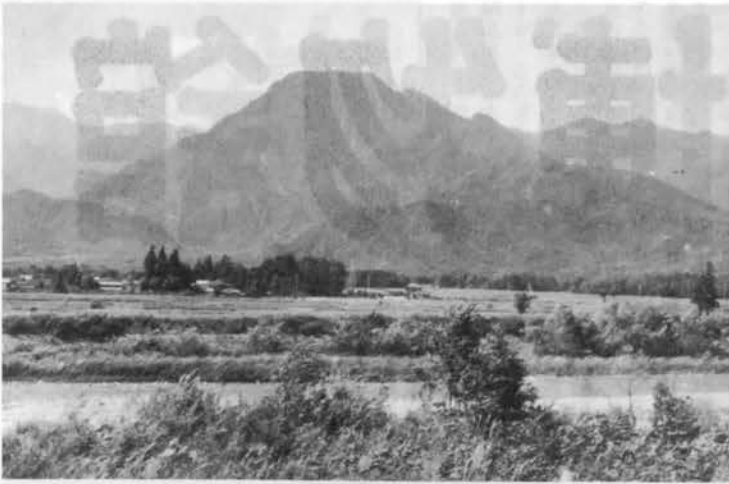
建物は地下一階、地上三階、延面積二二〇〇平方メートルの鉄筋コンクリート造です。展示室、講堂教室などの施設のほか三階には北アルプスが一望できる展望室が設けられる予定です。

新館が開館されるのは昭和五十七年六月頃の子定ですが、私たち関係者は市民の皆さんのご理解とご支援にささえられて発展してきた山博(さんぱく)と、皆さんから寄せられる大きな期待にそうべく、心を新たに建設事業にあたりたいと考えています。今後のご支援を心からお願い申し上げます。

# 北アルプス前山

## 有明山の開山史

青木 治



有明山(2,268m)全景

有明山は、安曇野の中央西に富士に似た山容を示しているところから、信濃富士ともいわれてきている。昔から麓の人々に聖なる山、神宿る山岳とし、木曾の御嶽や戸隠山と同様自然崇拜に基く原始信仰の対称としてあがめられ、その神を有明権現、神戸権現、戸放権

現と称し、有明山神社(穂高町宮城)と有明山社(松川村神戸)に祀られ、共に奥社は有明山頂(有明山神社は山頂中央、有明山社は山頂北側)に祀られている。

亨保九年(一七二四)に編述された信府統紀の旧俗伝に「天岩戸事件の時手力雄命の投げた岩戸が有明山に落ちたので、世が明るくなったから、有明山とも戸放が嶽ともいい、また、この山に鶏に似た鳥が時を作っているのが鳥放が嶽ともいったもい、一説に、この山の月は何時も陰がなく照すによって有明山といつた。」と記されている。

天岩戸事件後、手力雄命は、有明山麓の有明の里に天降り鎮座し、王化が沾うようにしたので、有明山神社(宮城)では、主神を手力雄命としている。

それに対して有明山社(神戸)では、天鈿女命が祭神であるが、そのことについては、惣鎮守有明山戸放略記(江戸時代編述、松川村大和田文書)では、「有明山を戸放が嶽、鳥放が嶽というが、その麓には船形の宮があって、数多い宮柱を立て、神官は神宮平に住み、鳥居の原を神戸原といった。また別の一節に、寛永十三年(一六三六)の夏、鼠穴の

何某の下女が、この原に野菜摘みに行つたら有明山の方から素晴らしい美女がきて下女に向い、「私は有明山の鈿女神である。お前に告げるが長い間乱世続きで鳥居も朽ち果て、自分の住む宮殿も無く誠に歎かわしい、依つて早く汝は庄屋に宮殿の再建を告げよ」と云つて立ち去つた。下女は急ぎ帰り、主人某に話すと、某は、下女を伴ない惣庄官正重宅に行き、鈿女神の宣告の通り許可を得て社殿を建て寛永十四年(一六三七)八月鎮座遷宮したのが、今の有明山社である」という。

この話の中の船形の宮というのは、三宮穂高社御造宮定日記(明応十年(一五〇一)穂高社文書)に出てくる遷宮の折の所役の村の一つ、船方郷のお宮のことであると言われている。船方郷は今の神戸と細野の間の鈿女神社の南方、乳川のほとりにあり、船方の地名が残っているが、天正七年(一五七九)の水害で退転した村といわれている。この時にお宮は西方、とりやつこの地に移したともあるいは洪水に流され下つて島新田(穂高町北穂高)で拾い上げられ、そこに鎮座したのが、今の島新田神社であるともいう伝承にもなっている。

二、有明山遙拝時代  
惣鎮守有明山戸放宮略記の別の一節に「建武から秀吉の頃まで乱世が続く神戸のとりやつこに鳥居も無いので、陽向石に神酒を供えて八月八日にお祭をした。」という一節がある。このことは、有明山社の社殿ができない以前の様子を示したもので、とりやつこ(登里奴)のこの地から、有明山を遙拝したことを示す言葉であると考えられる。今もこの地は、有明山社と共に有明権現の祭祀場所とし、有明山遙拝所としている。

また有明山神社の景(明治三十四年七月二十日出版、発行者岡村卓一)によると、その一節に「明治十一年ヲ以テ。本社再興ノ事ヲ其筋ニ稟請シ……山頂ノ社殿ヲ改造シ、又山麓ノ字宮城ト称スル丘陵ニ新タニ社殿ノ建築ヲ創始ス。是地ケダシ往古ノ社地ニシテ。今ハ唯鳥居一基ト……」云々とある。この事は今の宮城の有明山神社が新築される以前を示した言葉で、今の有明改良区の用水の取入口下方の天明霊社、有明山神社大鳥居のある地が有明山神社の社殿が出来た以前の有明山を正面に見て遙拝するには恰好の地であった。また前記有明山神社の景の絵図も拝殿とその前に幣殿があつても、本殿が見られないのは、拝殿から直接有明山体を拝んだ古式の名残を停めた信仰形式である。

三、有明山と詩歌  
仁科氏と朝廷との関係の濃くなった鎌倉時代には、この地にも京文化が浸透してきたと同時に、有明山の風景も音に伝えて京にもたらされた、京の文人墨客の一部も来遊したのもと思われる。その結果京で有明山を詠むもの、来遊して読むものもあつたが、登頂のこととはなく、里から眺める歌のみである。

(信府統紀、続古今集)  
片しきの衣手寒くしぐれつ、 有明山にかゝる白雲 後鳥羽  
(信府統紀)  
信濃なる有明山を西に見て、すゝる細野の道を行くなり 西行  
(有明山開山略記)  
信濃なる有明山をめてに見て 心細野の道こそゆけ 西行  
(信府統紀・風雅集)  
夏深きみねの松か枝風越て 月影涼し有明の山 慈鎮  
(信府統紀)  
駿河なる富士を信濃にとりとはなし 煙にまがふ秋の名霧 古き歌として詠人しれず

四、有明山の開山

この山の登頂は、江戸時代に修験者(山伏、靈神)により登山されている。

1、松川馬羅尾道の開削

有明山へ最初に登頂したのは、有明山開山略記(享保八癸卯年(一七三三年)板取村高橋太兵衛直春記)に依ると、享保六年(一七二一年)閏七月八日板取村の修験宝重院有快と弟子二人・村人、尾曾・高橋等十四人、計十七人で有快の先導で、八日早天板取を出発し滝ノ沢より表口である黒川沢口よりの落合に出で、尾根を経て頂上に達している。

以後この道からの登高は、信濃国安曇郡有明山一件(大和田文書)に依ると、水内郡権堂村善光寺修験、柳原寺音界がこの地板取村に来て、折禱医薬の法で村人に取り入り、その協力で登頂に成功し、以後松本和泉町、新田村(豊科)光村(豊科・明科)池田町村(池田)等各地に信者を得て講を作り、しばしば登山していたが、その内、自分こそ有明山開山であると僭称するに及び、有明山社神主大和田市正や村人との間に争を起し、江戸の寺社奉行にまで発展した訴訟となったが、地元側、大和田市正等の勝訴となり、彼は日本半国(三十三ヶ国)立入禁止の追放の刑に処せられた。



柳原寺音界石仏(有明山社境内)

御神水の岩窟などを経て山頂に達する。極めて険阻な道である。ここを経て登山した木曾御嶽の行者一山は慶応三年(一八六七年)に、前記落合付近で遭難している。この道の実際の開削者は、明治六年(一八七三年)に登山した人、扇町(堀金村)の天明行者(倉田為吉)であると思う。

3、表口宮城黒川沢口道の開削

この登山道は黒川沢をさかのぼり、荒崎滝・妙見滝・白河滝・石門などの行場を経て、馬羅尾口よりの落合(六合目で稜線に達す)・剣岩・獅子岩・金霊水・御神水の岩窟などを経て山頂に達する。極めて険阻な道である。

2、裏口中房温泉口道の開削

この裏口より登頂した行者に田尻村(南安曇郡堀金村)本覚寺杉本院寛良がある。寛良は同村正福院周山・穂高村(穂高町)大聖寺慶山・弟光寛らと供に文化十二年(一八一五)五月中房温泉で五十日の行と十七日の断食を行い。六月十五日牧村の抽頭(ちゅうとう)の案内で上堀金村・長尾村の信者等十七人を伴って登山し、山頂で法螺を吹き立て、読経護摩修行をし、供養の宝塔を立てている(堀金村田尻・内田文書)。

た。

修験者は登高途中に靈神祠・碑・石神石仏類を建てる慣行があるが、今でも有明山登山の途中には、数多くの朽ちた靈神祠や碑等が見られる。その一つ松本和泉町の講仲間が馬羅尾口の奥に安置した音界石仏は明治になって、有明山の氏子が背負下ろし、現在神社の南側境内に安置してあるし、滝ノ沢の不動明王像は音界等の手になるものであるという。

彼はそれ以来、多くの信者を得て有明講を作り、しばしば登山し、荒崎滝・妙見滝・白河滝の行場で修行を積み、山頂に達している。明治八年(一八七五年)には宮城の下の権現地籍に大鳥居を建立したり、安曇・松本等各地に有明講を結成したりして、有明山神社の基礎を一層かためた人である。

五、奥社・里社の成立

1、有明山社(神戸)

有明山開山記の一節に「寛永十四年(一六三七年)氏子がどりやつこ(登里奴)の北十町の地に方百間に松を植え地方を築いて社殿を建立した」というし、また寛永十四年の棟札もあり、その棟札には「真体は天錫女命也」等書かれていて、今の神社の成立は江戸時代の初期と推測することができるが、奥社のことは正保の国絵図にも記載がなく、只有明山一件(大和田文書)の中に「文政十年より三十七年前に造り七月登山遷宮」とあるので



有明山社(神戸)奥社の祠

それから推して、安永・天明の頃と思われる。

2、有明山神社(宮城)

里社は天明行者によって、その基礎が明治初年に作られたのを明治二十一年、神戸有明山社の氏子の許可を得て、旧南穂高村寺所(豊科)の岡村卓一氏に依り今の宮城の地に建築されたものである。最初本殿は無かったが後に穂高神社から不要になった本殿の拵下げを受けて建立したものが、現在の里社の本殿となっている。

奥社の建立については、資料不足で不明であるが、江戸時代の後期に建立されたか、明治に入り、天明行者等の手によって建立されたものを、有明山神社の里社再建の折、奥社も一層立派なものにしたとも考えられる。何れにせよ頂上にある奥社の建立ということは有明山の初期の登山に重要な歴史的意味を持つものである。(穂高町教育委員長)



有明山神社(宮城)奥社の祠

# 貝の化石(ホタテ貝の仲間)

木船清

昔海底だった北安曇地方は各地で化石を採集することができます。(図一) 古生代や中生代の化石は北アルプスをつくっている西山から、新生代の第三紀や第四紀の化石は東山をつくっている地層から主に採集されます。種類も多く貴重なものも少なくないこれ等の化石の中で、誰もが一度は採集してみたいと思う化石は動物化石の中の貝、特にそれもほたて貝の化石ではないでしょうか。

中生代の三畳紀(約二億年前)から化石として知られるホタテ貝の仲間、一般に形が大きい上に姿も立派で風格があります。昨年の冬のこの化石も含んだ崖が新しく露出しましたので紹介します。

姫川に沿って国道を下ると小谷村の下里瀬に出ます。ここで道は直角に左右に分かれますが、この道を右に土谷川に沿って行くと奉納温泉に出ます。温泉をすぎて少し行くと川底へ降りる道があり、それを下ってゆくと、

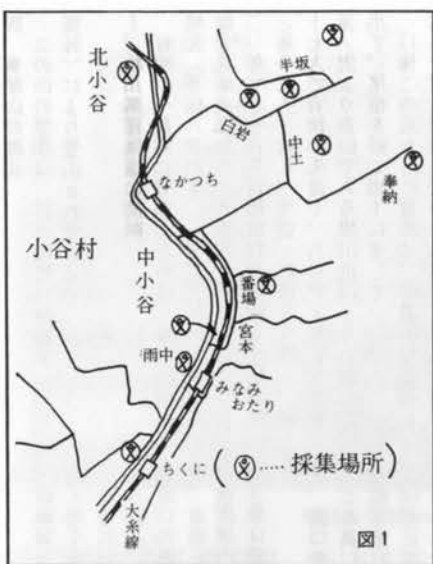


図1

新しいえん堤に出ますが、その手前の右岸(西側)で採集できます。(写真一) ここではサンドパイプ(カニの巣穴・写真二)や色々の種類の化石が採集できますが、ほたて貝の仲間が目立ちます。この化石に一番近い現生の貝は、いたやが貝科に属するほたて貝 [Patinopecten (Mizuhopecten) yessoensis (Jay)] で東北地方からオホーツク海に分布し、水深十〜三十mの砂礫底(礫を五〜六十%含む所)にすんでいます。(写真三) 大きなものは二十cm位の類円形を示し、殻頂の前後両側に真直な背縁をもつ耳状突起をもち、右殻前耳に弱い足糸湾入をもっています。放射肋は低く太く二十四〜二十六条あり右殻の方がふくらんでいます。水温八〜九度(東北は三月頃・千島では七月)で産卵し四年間で十五cm位まで成長します。海中の浮遊物を餌とし、移動は殻を開閉した時の反動で行い、一方の殻を帆として水上を泳ぐというようなこととはありません。この貝は大変おいしく食用にされる他に、貝細工などにも利用されています。



写真1



写真2

化石からわかることは多くあります。その一つは、その化石からその地層のできた時代が推定できるということです。例えばトリプルホタテは、上水内郡戸隠村川下付近で採集され新種として命名されたものですが、北安曇郡小谷村千国崎から産出したことから、小谷の地層と戸隠の地層が同時代のものであることがわかったという推測がなりました。唯時代の同定では伴

の付こ近で採集されこの貝の主なる化石の仲間がは次の通りです。

1 ヤマサキホタテ  
二十〜二十二本の放射肋をもち、縦溝によって一〜二条に浅く割れているのが特徴、大型円扇形。柵層、猿丸層、雨中層から産出します。

2 トリプルホタテ  
放射肋二十二本内外、肋は縦溝によって二分され肋間は肋より幅が狭くなっています。左殻の肋は稜線状であり柵層から産出します。

3 ナガノホタテ  
略

なお、トリプルホタテ、ヤマサキホタテ、ホタテ貝は性質が漸移し、三者の区別の困難なことが多いのが一般であり示準化石として大切なものです。

って産出する他の貝などの動物群として比較しないともちがえることもあります。

もう一つの大事なことは、堆積当時の古環境を知ることができるということです。ほたて貝は水温の高い所には生息しませんからその化石によって、水温や水深など推測できるわけですが、化石採集上注意しなければならぬことは、化石がそこで死んで化石になつたのか(現地性)別の地層のものが流されてきたのか判別しなければ、大きな間違いをおかすこととなります。現地性の化石ならば、貝殻など新鮮でまわりがすり減っているようなことはなく、又両殻がついていて、地層に対して生きていた状態で産出することなどです。又産状がばらばらなの密集しているのかなど大切なことです。ほたて貝などは一個体が完全に採集できることはあまりないので、小さい破片も大切に採集してきましょう。そして十分に活用したいものです。



写真3

右殻(ほたてが貝)  
patino pecten (Mizuhopecten)yessoensis (JAY)

## 博物館だより

山岳博物館の全面改築工事の入札は先頃行なわれ、本体工事、伝刀組、機械設備、金沢工業、電気設備、大北電設共同企業体に定まりました。

9月8日には市長はじめ関係者が集まり起工式が行われ、本格的な工事が開始されました。

建築工事は56年11月完成、オープンには57年6月予定で進められています。

山と博物館 第25巻 第9号  
一九八〇年 九月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL②〇二二一  
大町山岳博物館

印刷所 長野県大町市俵町  
大糸タイムス印刷部

定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)